

小
(問題)
論
文
2025年度

〈R07196361〉

注 意 事 項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 2 問題は2～4ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 記述解答用紙記入上の注意
- (1) 解答用紙の所定欄(1カ所)に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- (2) 所定の欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- (3) 受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。
- (4) 解答用紙は折り線のところで折ってから解答すること。
- (5) 解答は縦書きとし、楷書で上から下へ書くこと。
- (6) 題名(タイトル)は記入せず、解答用紙の一行目から本文を書き始めること。
- (7) 解答用紙は表裏両面を使用する形になっている。表から使用すること。
- (8) 下書きには問題冊子の余白を利用すること。
- 5 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。
- 6 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにするなど。
- 7 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 8 この問題冊子は持ち帰ること。

次の文章は、Chim↑Pom (チンプム) というアーティスト集団が2008年に広島市の原爆ドームの上空で行ったパフォーマンスについて、グループの代表者である卯城竜太氏が記したものである。これを読んで、後の設問に答えなさい。

広島の上空を「ピカッ」とさせる

2008年に《ヒロシマの空をピカッとさせる》という作品を作りました。10月の晴れた朝、広島市の原爆ドームの上空に、小型セスナ機の飛行機雲によって「ピカッ」の3文字を描きました。《アイムボカン》で広島市現代美術館公募展の大賞を受賞した副賞として、その美術館で開催される個展のために企画したものでした。

きっかけは、林が不意に発した一言です。「広島の上空をピカッとさせるのは？」1年前くらいから広島で展覧会をやることは決まっています。僕らはことあるごとにプランを考えていました。そもそも大賞を受賞したときに審査員の一人から「お前ら、原爆ネタだけはやるなよ」と釘をさされたことがあり、その違和感が続いていましたが、広島で作品を作るからにはやはり「原爆」を避けて通ることはできないだろうと思っていました。しかし、これがなかなか難しい。まず僕らと原爆にどんな接点があるのか、ずっと考えた結果でした。

Chim↑Pom が最も大事にしていることは、リアリティです。嘘はつきたくない。社会道徳はさまざまな出来事と想いを取り込んで作られますが、その価値観とリアリティは文化の違いによって変わり、時代によって移ろいやすいものです。戦後63年たって、原爆についてもあらゆる人の数だけそれぞれの距離感と、リアリティが生まれていました。むしろ「原爆にリアリティがない」という人がほとんどかもしれせん。

それを「ひどい」と言うのは簡単ですが、「ただ簡単なこと」というのは往々にして無責任で感動がないものです。良いことも悪いことも全部受け止めなければ、複雑な社会をひとつの作品では表せません。作品が社会の映し鏡だとしたら、それはなるべく曇りがない状態でないと、見た人は映ったものにリアリティを感じないでしょう。

とはいえ被爆の問題というのは当事者性がとてつもなく大きい。僕らが入り込む隙なんてまったくないほどの、想像を絶する被爆者の体験があります。しかもそれは超個人的で、「被爆者」とまとめられるように彼らの体験は一樣ではない。知ったように体験を語ることは、もはや今の若者には不可能です。反核の活動家ですら、二世になると当事者ではないから自分が体験したみたいなきことを言えない。そんな空気があります。でも、だからこそ、やはり問題になるのは「当事者性」だと思います。

僕らは直接的には原爆や広島市の当事者ではないから、安易に代弁する資格はない。しかし、だからといって僕らは原爆を問題にできないのでしょうか？あの審査員が言うように、原爆に関係する資格はないのでしょうか？言い換えれば、「原爆は僕らに関係していない」のでしょうか？僕らが悩んでいたのは、そんな僕らと原爆の関係についてでした。

「平和」の当事者として表現する

林の一言に惹かれたのは、「ピカッ」という言葉の軽さでした。じゃあ実際に光らせるか、とも考えてみました。やはりどうも違う。どうも重い。「ピカッ」とさせる」と「光らせる」というのは、同義ながら明らかに違うものでした。たとえば原爆が発した瞬間、アメリカは空を光らせました。でもその瞬間の出来事は、とてもじゃないけど僕らには表現なんて許されなほどの理解できない現実です。それならなぜその光をなぞるのか。そんなことを考えながら、僕らがなぞれるのは「光る」ことではなくて「ピカッ」であり、表せるのは「戦争」ではなく「平和」なんじゃないか？という入口に辿り着いたのです。

「被爆体験」と僕らとの距離は、年数で測れないほどあまりに遠い。それを表現するのは絶望的です。とはいえ僕らは60年以上かけて作り上げてきた、戦後の平和を生き延びている。そして、たしかにそれは1945年8月6日の経験が礎になっている。僕らが原爆をモチーフに表現しなければいけないのは、被爆の悲劇ではなく、現代に生きる僕らの平和、その「実態」であり、「ピカッ」はその根をえぐった光の表現じゃないか……。 「ピカッ」の軽さの内実は、まさに僕らの軽さであり、戦後日本の独特な軽さなの

でした。

「ピカツ」を光ではなく文字で表すことを、後に美術評論家の榎木野衣のえさんはマンガ的だと指摘しました。1コマの中で状況を説明するために描かれる擬態語、あの「シーン」とか「バーン」でお馴染みのデザイン化された文字のことです。戦後の平和とマンガ文化との間には、独特なバーチャル感や幼稚性など、ニアリーイコールとも言える類似した雰囲気があります。「ヒロシマの空をピカツとさせる」のイメージも、たしかにそんな感じを狙ったものでした。

実際は日本に一人しかいない世界的な名パイロットに文字を描いてもらったんですが、それでもやつぱりヘタウマな字になる。待ち望んだ青空に、その脱力した感じの「ピカツ」が静かに現れ、風化しながら消えていく。ドームの下には幼稚園児たちが列を成して歩いていて、それは悲劇の記憶に溶け込むように景色に自然に馴染んでいる。後に編集者の阿部謙一あべけんいちさんと編集して刊行した『なぜ広島空をピカツとさせてはいけないのか』（河出書房新社、2009年）という本の前書きで、林はその日のことをこう書き記しています。「あの日、広島空をピカツとさせるため、僕たちはかつてないほど空を眺めた。空は綺麗で、目の前には原爆ドームがあった。あんまりだと思った」。その「あんまり」な情景は、僕らにとつてまさに平和そのものだったのです。

大きなプロジェクトだったので、広島市現代美術館のスタッフたちにも事前にも事前にと了承を取っていました。ところが、「ピカツ」を描いた翌日の地元紙・中国新聞に大きな記事が出ました。「広島上空『ピカツ』の文字 現代美術館立ち会う 市民『不気味だ』（2008年10月22日付）」という見出しで市民や被爆者団体の苦言・苦情が報道され、それから1週間あまり批判のキャンペーンが張られました。

後になって聞いたところ、最初に新聞社に來た問い合わせは苦情ではなく、質問が3件あっただけだったそうです。しかし原爆投下から現在までの歴史の分だけ、広島政治は根深く複雑で、広島市現代美術館は正式には知らなかったという立場を取り始めました。

僕らの展示プランは『ピカツ』とともに『リアル千羽鶴』という、リアルな鶴と折り紙で作った千羽鶴とをセットで構成するもので、すでに広島市の小学校の子たちが鶴をたくさん折ってくれていました。しかし新聞沙汰の騒ぎになったアーティストの作品に関わるのは問題だ、ということになり、展示するものがなくなってしまいました。そして、展覧会はやむなく中止となりました。

騒動が「見えないもの」を浮かび上がらせる

展示は中止になったものの、騒動は僕らの想像をはるかに超えて、色んなものを浮かび上がらせました。批判や反発感情はもちろん、ある種のタブーに潜む鬱屈ふくごとしたもの、原爆問題に対する広島と東京のギャップ、問題への世代間格差、被爆者団体のリアルな声、被爆者の声なき声、ヒロシマを背負う広島、アトと公共性、ネット炎上……これまで潜んでいた様々な問題が噴出したのです。

事前通知を行わなかったことを謝罪するために被爆者団体の方々にも会ったのですが、それは僕らにとつてはもちろん、彼らにとつても新鮮な体験だったようです。彼らは高齢なので、東京から来た若者が事務所を訪れること自体あまりあることはありません。こちらは謝りに行ったつもりでしたが、逆に「めげるな」と言つて励まされてしまいました。

直接話を訊いてみると、「私たちはもうすぐ死ぬから」と思いながらも、原爆の悲惨さを未来に語り継がないといけないという大きな使命感が彼らにはある。でも多くの被爆者はつらい記憶なんか忘れたいと思つている。被爆者団体も、別の被爆者から批判されている。忘れたいという感情と残したいという感情、ハイレベルで複雑な矛盾を感じました。また二世の活動家たちと話してみても、これから自分たちが運動の当事者になるが、いったいどうやっていけば良いのか分らないと悩んでいる。

弱つていた僕らに気を遣つてくれたのか、彼らは被爆体験以外にも色んなことを話してくれ、再度「ケチョンとするなよ」と叱咤しつたげ激励してくれました。騒動の渦中、逆風が吹き荒れていた広島で、僕らの話に耳を傾けてくれたのは、結局、被爆者団体の方々と現地の協力者2人だけでした。彼らは僕らの一番の理解者になってくれ、広島での僕らを支えてくれました。それは先述の『なぜ広島空をピカツとさせてはいけないのか』という騒動の検証本として形になり、改めて東京で自主開催した展覧会「広島ー」（原宿VACANT）展のトークショーへと発展していきました。

特に「カリスマ被爆者」こと坪井直つばいなおさん（広島県原水爆被害者団体協議会理事長）は親身になってくれ

て、その後も関係は続きました。3・11後もすぐにメッセージを送ってくれて、それは僕らの震災後一発目の作品《Never Give Up》となりました。ファックスで送られてきたのは「不撓不屈 Never Give up! 人の英知を信じる 坪井直」という墨書。教師だった現役時代から「ピカドン先生」とも呼ばれている彼が、執筆や講演などで何度となく使ってきた座右の銘でした。

《Never Give Up》というのは、広島と東北を重ねた復興への思いであると同時に、核兵器廃絶という人類的命題でもあり、何より3回もの危篤状態を乗り越えた坪井さん自身への（被災者一人ひとりに重ねての）メッセージです。僕らはそれを「ケチヨンとするなよ」というあの日の励ましに重ね合わせ、自らの行動をたきつけたのです。

「広島ー」展は、2011年に原爆の凶丸木美術館で行った「広島ー!!!」展まで「ー」を増やしながら巡回しています。いつか人類の核問題、放射能問題が解決するその日まで「ー」を増やしていこうと思っています。

〔出典〕Chim ↑ Pom 『芸術実行犯』（朝日出版社、2012年）

なお、作問の都合上、原文の一部を改変した。

〔注1〕飛行機雲で文字や絵を描く「スカイライティング」という手法で、広島市・原爆ドームの上空に「ピカッ」の3文字を描く様子を収めた映像作品。広島市現代美術館での展示のために制作された。「ピカッ」の語は「ピカドン」から。

〔注2〕2007年にChim ↑ Pom が制作した作品。内戦によって約600万個の地雷が埋まっているとされるカンボジアで制作。個人で地雷の撤去作業を行ってきた人物やカンボジア軍の全面協力のもと、プリクラ帳やブランドバッグ、iPodといったメンバーの私物やメンバーをかたどった等身大の石膏像を撤去地雷で爆破するというもの。

〔注3〕Chim ↑ Pom のサブリーダー、林靖高氏。

〔注4〕「二見（二聴）すると下手そうだが、よく見る（聴く）と下手さが計算されており、真似しようとしてもできなかったり、下手さが個性や味となっている」という意味の用語。

〔注5〕リアル造形の技術を使って制作した実物大の丹頂鶴フィギュアと、無数の折り紙によって構成された作品。

〔注6〕東日本大震災後、初めてChim ↑ Pom が作った作品。「ピカッ」騒動のあと交流が続いていた坪井直氏からファックスで送られてきた「不撓不屈」の文字を、福島県相馬市で拾った泥だらけの額に収めたもの。

〔注7〕丸木位里・俊夫妻が共同制作した連作絵画「原爆の凶」を常設展示する美術館。

〔設問〕

このアーティスト集団が「広島のをピカッとさせ」たことについて、あなたはどのように考えるか。本文の内容を踏まえながら、自らの見聞や読書体験なども参考にして、九〇一字以上一二〇〇字以内で述べなさい。ただし、改行によって生じる空欄は字数に数えるものとする。

〔以下 余 白〕

※Wikipedia掲載に際し、左記のWikipedia出典を追記しております。

